

# アウクスブルク滞在記

斎藤 明寛

## はじめに

今回、尼崎市の青年使節団としてアウクスブルクへ渡航出来たことは、私自身にとって非常に有意義で充実したものになりました。海外の文化を学びたいという意思は多分にありましたが、個人での留学や旅行では、語学力や行動範囲の面からどうしても限界があると感じていました。そんな時、尼崎市の市報に青年使節団の情報を見つけ、尼崎市の使節団として様々な公営機関を見学できる事を知り、今回の渡航に至りました。

アウクスブルクへは、関空からの中東ドバイ経由という、計20時間を超える長旅でした。降り立ったミュンヘン空港は、朝晩から日中にかけての寒暖差はあるものの、寒気という前情報とは打って変わっての暖気でした。アウクスブルクも例年に比べ、異常気象に見舞われていて、現地の方々はとても暑そうにされていましたが、それでも日本の真夏日を思うと、アウクスブルクの気候は非常に心地よく感じました。

ミュンヘン空港で心温かい出迎えを受け、一路ホストファミリーの待つホテルへ向かいました。滞在先一家は、日本武道に大変明るいシューベルトさん御一家だった。家族構成は、大黒柱のヘンリーシューベルトさんをはじめ、ディアナさん、4歳になる息子さんレアンダーくんの三人家族だ。みんな

などとても明るく親切で、気兼ねなく滞在を満喫する事が出来て良かったです。

## 滞在中の行動

滞在中は様々な施設を訪問させていただきました。

アウクスブルクサッカーチームのホームスタジアムであるWWKARENAは、スタジアム地下にある井戸の水を利用してのスタジアム温度管理など、随所に環境配慮がなされており、ドイツのECOに対する意識の高さが見えました。また同時に、FCAでプレーしている日本人サッカープレイヤーの宇佐美選手にお会いできるという嬉しい展開もありました。

アウクスブルク市庁舎では絢爛豪華な「黄金の間」や「侯爵の間」を視察し、後に市庁舎芳名録に署名させて頂きとても有意義な時間を過ごしました。尼崎市の使節団員は全員筆ペンでの署名を行いました。

その後、市庁舎地下にあるレストランでの昼食でドイツ伝統料理を頂いたり、アウクスブルク大聖堂や市立図書館を訪問しました。欧州の奥深い歴史を感じる大聖堂の出立ちと、近代的なデザインとシステムを兼ね備えた市立図書館とのコントラストに、市民と歴史との共存を感じる事ができました。

24日は、バイオマス発熱発電所を視察しました。ドイツでは、「電力の自由化」がなされているらしく、発電と売電は分別さ

れているそうです。木屑を燃やして熱を起こし、発生した蒸気を使いタービンを回して発電し、木屑を燃やすことによって排出されるCO2は、電気ので塵を排除し、極力浄化されて排出されているそうです。発電行程で生まれる灰は森林や農作物の肥料として使用され、循環するという地球環境に大変優しいシステムでした。ドイツでは、先般日本で起こった東日本大震災での福島原発の事故を受け、ドイツ全土での原子力発電廃止が早まったということを知りました。事故が起きた国で原発が再稼働され、事故が起きなかったドイツで福島での事故を教訓に原発撤廃が早まったことに少し皮肉を感じました。

市内にあるボタニカルガーデンを訪れ、現地に造られた日本庭園を視察しました。時季には野点も行われるそうで、アウクスブルク市民の方々にとっての憩いの場になっているそうです。

続いて市内にあるアウクスブルク大学を訪れました。日本の大学と比べて大きな違いは無かったですが、個人的に目を惹いたものは、学生のみが持てるプリペイドカードのようなもの。これはカードにお金をチャージして学校内のあらゆる施設で使用できるというものです。面白い点は、学校のみならず校外でも使用できるということで、市内で運営しているバスやトラム、映画館、劇場などで学生割引を受けることができるもので、校内にとどまらず市内でもサービスが受けられるというものでとても興味深かったです。

## 仏教センター視察

私が僧侶ということで、現地の仏教寺院や仏教に関する活動を見聞したいという事前の希望が通り、個人でゲッギンゲンにある仏教センターを視察させて頂きました。名前から分かる通り、堂宇を構える寺院では無く、仏教の体験が出来るセミナーといった雰囲気でした。この仏教センターの指導者は禅宗の僧侶で、実際に得度や受戒を行い、僧名も持っていました。

エクササイズ感覚で、座禅だけ行っているのかと思いきや、木魚を叩き読経もしていたので驚きました。指導者を含む数人にインタビューをしてみたところ、現地での仏教は禅宗のみで、他の宗派は存在しないそうです。当日は20名程が、座禅、読経を行っていました。海外での仏教に触れ、とても良い刺激になりました。

## まとめ

今回の滞在では、ドイツの文化を詳しく学べただけでなく、普段見れないような施設を見学できたことにより、ドイツのECOに対する意識の高さを感じることができました。今回の経験を、自分の立場を活かして、たくさんの人に伝えることができればと思います。